# 網状言論F

## ～ポスト・エヴァンゲリオンの時代～

### プレゼンテーション予稿集

Version 1.0

『エヴァンゲリオン』の衝撃から五年、その間にサブカルチャー状況はどのような変遷をたどり、現在どのような姿を描いているのでしょうか。一方でもはや作家性を反映せず（オリジナリティの喪失）、定式化された物語・図像要素の組み合わせのなかで様々な作品が制作され、かつ消費されるようになったともいわれています（パロディの自律化）。「網状言論F」はこうした事態を俯瞰しつつ、他方そのような状況で可能な作家性の在り方を、東浩紀氏のウェブサイトで行われた同名の討議を「Final」「Followup」「Forward」── 三つの「F」で繋ぐトークライブのなかで考えてゆきます。

**パネリスト**

**東　浩紀**
（哲学者）

**伊藤　剛**
（漫画評論家）

**小谷 真理**
（SF&ファンタジー評論家）

**斎藤　環**
（精神科医）

**竹熊健太郎**
（編集家）

**永山　薫**
（漫画評論家）

**企画**

TINAMIX編集部・TINAMI
www.tinami.com/x/

**主催**

株式会社多聞
www.tamon.co.jp

**協賛**

アミューズメントメディア総合学院
www.amgakuin.co.jp

株式会社ブロッコリー
www.broccoli.co.jp

**2001年9月16日（日）18：00～20：30**
**東京・池袋 メトロポリタンプラザ（12階）第1会議室**
[ライブ中継] www.tinami.com/x/moujou/live.html

**www.tinami.com/x/moujou/**

# 東 浩紀 Hiroki, AZUMA（哲学者）

## 動物化するオタク系文化

1971年生まれ。批評家、哲学研究者。東京大学総合文化研究科修了。学術博士（哲学・表象文化論）。日本学術振興会特別研究員。フランス現代思想とサブカルチャーと文学が主な関心領域。著書に『存在論的、郵便的』（新潮社）、『郵便的不安たち』、『不過視なものの世界』（朝日新聞社）。11月下旬に、オタクとポストモダンの関係を主題とした『動物化されたポストモダン』（講談社現代新書）を出版する予定。ホームページは、http://www.t3.rim.or.jp/~hazuma/

### ■ ポストモダンとは何か？＝「大きな物語」の崩壊

**～1970**
大きな物語が機能している段階（理想の時代）
＝ポストモダン以前

**1970～1995**
大きな物語が虚構として代補される段階（虚構の時代）
＝ ポストモダン第1期

**1995～**
大きな物語が消滅する段階（動物の時代）
＝ポストモダン第2期

理想の時代から虚構の時代への特異点…連合赤軍
虚構の時代から動物の時代への特異点…オウム真理教

### ■ 虚構の時代から動物の時代へ（fig.1）

物語の時代からデータベースの時代へ

・例：イデオロギーからインターネットへ

オタク系文化での現れ

・物語優位からキャラクター優位へ
・作家性の神話から萌え要素のデータベースへ

### ■『新世紀エヴァンゲリオン』の二重性

（A）大きな物語の自己崩壊
　　＝「虚構の時代」の終わりを告げるもの
（B）二次創作の爛熟
　　＝二次創作を模倣する原作という捻れ（ＴＶ版最終回）

→ オリジナルがシミュラークルをシミュレーションしてしまう時代
→ シミュラークルの背後にあるデータベースの台頭
→ 萌え要素化された綾波レイや惣流アスカ

### ■ データベース化するキャラクター文化（fig.2，fig.3）

大塚英志「個々の作品の背後には大きな物語がある」
（物語消費論）

**fig.1**

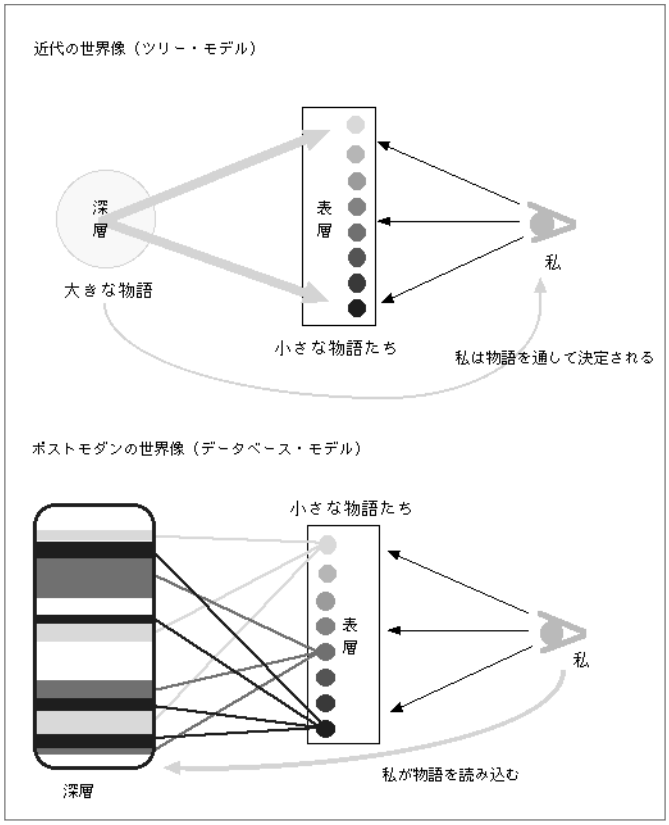
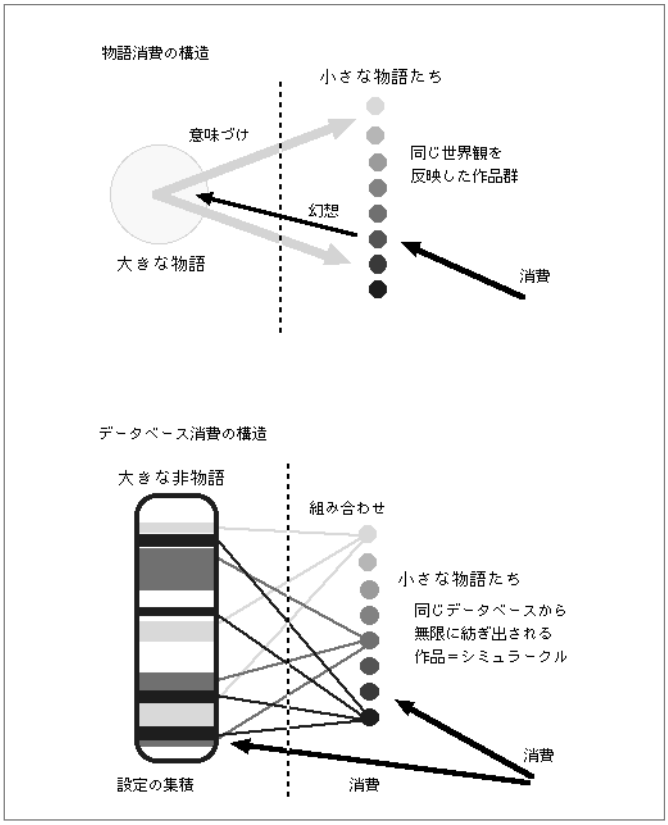



**fig.2**



しかし1995年以降、この図式は成立しないのではないか？
↓
むしろ…
仮説「個々の作品の背後には設定やキャラクターのデータベースがあり、さらにその背後には「泣き」や「萌え」のデータベースがある」（データベース消費論）

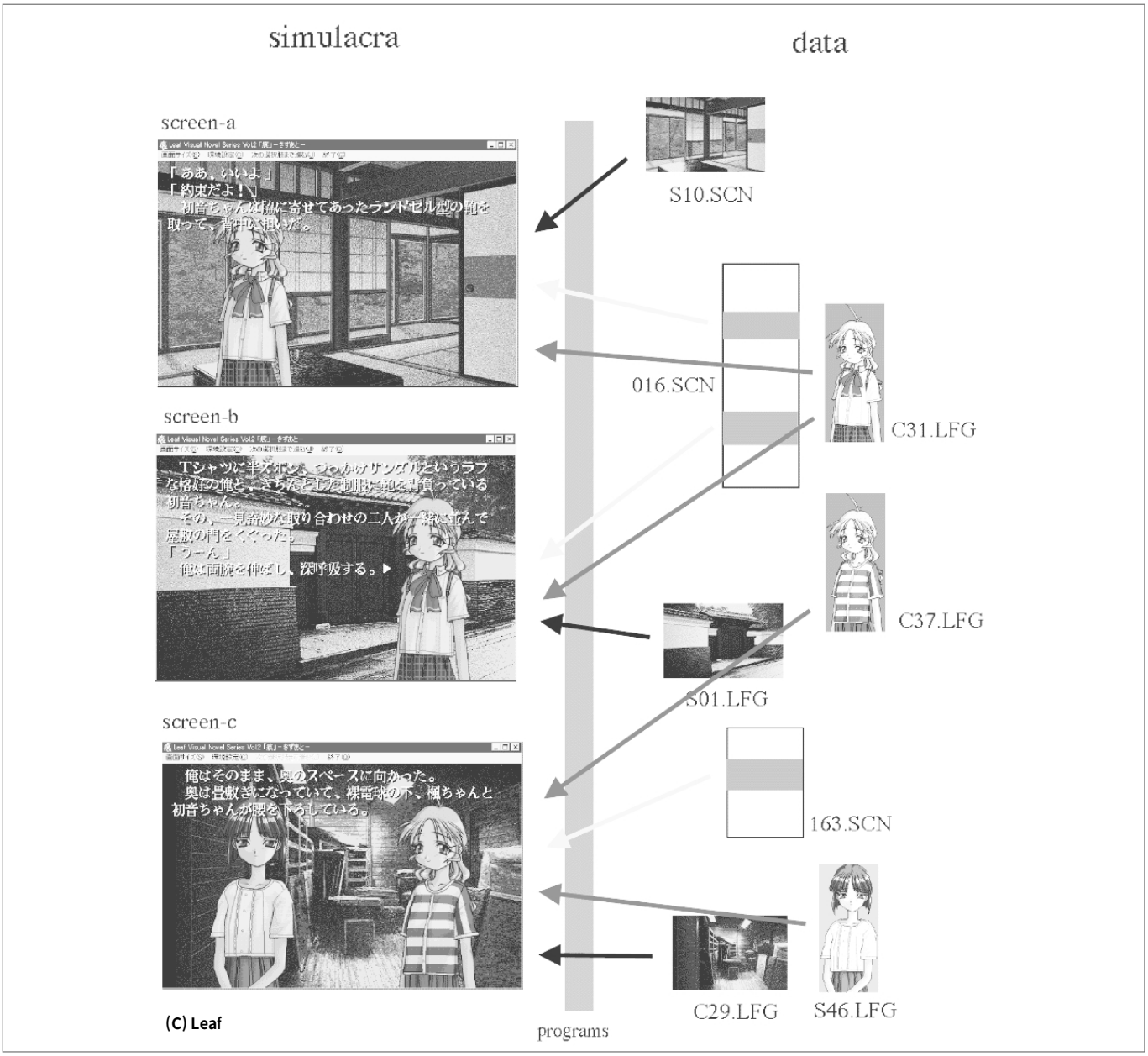
・例：ポスト・エヴァンゲリオンの時代を象徴する
　『デ・ジ・キャラット』

## ■データベース消費の一例：ノベルゲーム（fig.4）

システム（データベース）のレベルとシナリオ（シミュラークル）のレベルで分離した消費行動

fig.3

fig.4



# 斎藤 環 Tamaki, SAITO（精神科医）

## オタク論における超越論的視座

1961年、岩手県生まれ。1990年、筑波大学医学専門学群環境生態学卒業。医学博士。佐々木病院精神科診療部長。また、青少年健康センターで『実践的ひきこもり講座』ならびに『ひきこもり家族会』を主宰。専門は思春期・青年期の精神病理、および病跡学。著書に『文脈病』（青土社）『社会的ひきこもり』（PHP研究所）『戦闘美少女の精神分析』（太田出版）『若者のすべて』（PHPエディターズ・グループ）。共著に『登校拒否のすべて』（第一法規出版）『メンタルケースハンドブック』（中央法規出版）『精神科臨床における症例からの学び方』（日本評論社）。このほか年内に対談集、ひきこもり関連本、『解離』問題に関する論考集などの出版が予定されている。また現在、雑誌『Mテレパル』誌上で映画評を、『毎日新聞』で論壇時評を、『こころの科学』では思春期エッセイ風の連載を担当中である。ホームページは、http://www.bekkoame.ne.jp/~penta2/

**【戦闘美少女の精神分析、その後】**

・戦闘美少女＝ペニスに同一化した少女

・オタク男性は、彼女たちの所有者たるべく、「少女」の周囲に多様な幻想（同人誌、フィギュア、ＳＳ、評論）を形成する。

・戦闘美少女のリアリティは、彼女たちが完全に虚構内存在、すなわち欠如態であるがゆえにはらまれるリアリティである。

・男性は女性を欲望する際に、彼女をヒステリー化している。

・ヒステリー化とはすなわち、女性の可視的な表層から、不可視な本質を読みとり、その本質において彼女を所有しようと試みる身振りである。

・「戦闘美少女」は、視覚的に媒介された空間において反転したヒステリーである。

・「反転」の根拠は、彼女たちの多くに「トラウマ」が欠けており、同時に享楽＝戦闘が可能であるという点にある。

・彼女たちの本質とみなしうるものは、単純にその虚構性のみであり、それゆえ形態的な多様性が可能になる（猫耳、メイド服、眼鏡、ショタ　etc.）。

・それゆえ、彼女たちの形態がたまたま幼女に類似していても、それは現実の幼女とはほとんど関係がない（→オタクは「ロリコン」ではあっても「ペドファイル」ではない）。

**【オタクとやおいとの対比】**

オタクの基本的欲望＝キャラ萌え：視覚的欲望＝所有する欲望、「持ちたい」

(1) 男性オタクの場合、欲望を持つためには、まずみずからを象徴的に定位する必要がある（「オタク」の呼称への独特の執着）。
(2) 欲望の対象は、常に幻想の側にあり、それを獲得すべく隠喩的連鎖をたどりながら、「知」を生産する（＝網状言論？）。
(3) しかし主体定位への欲望が最終的には優位であり、このためついに欲望の真の対象を掴むことはできない（→オタク男性はしばしば、日常においても異性のパートナーを必要とする）。

やおいの基本的欲望＝位相燃え：関係性への同一化＝「なりたい」

(1) （やおい）女性は、象徴界には欠如した存在という定位しか獲得できない。これは、やおい作品においてほぼ完全に女性が排除されている事実に対応する。
(2) 男性同士がホモセクシュアルな関係におかれるという設定は、「男性」に力点がおかれているわけではない。均質な存在であること、ペニスとアヌス（ではなく「やおい穴」説あり）を備え、攻め－受けの関係性が形式化しやすいことに意味があるだろう。
(3) ファリックな関係性を所有しようとするのではなく、関係性そのものに同一化を試みること＝享楽の次元への接近（やおい女性はしばしば、日常における異性パートナーを必要としない場合がある）。

**【なぜ少女なのか？】**

・「情報化幻想」への性的抵抗

セクシュアリティは象徴的次元で決定づけられるため、情報化（＝データベース化）できない。すなわち、表象のデータベースを利用して、欲望の対象を恣意的に構成することは不可能である。

・語ること→物語化への欲望の根底には、セクシュアリティの問題がある。

・ファリック・ガールの変形としての「ショタ」

・宮崎アニメにおける少女の機能

ナルシシズムの投影としての美少女のイコンが、宮崎の創造性の根底にある。

宮崎アニメが本来的にはらんでいる生命論（＝全体化）志向を、美少女のイコンが去勢する。

・少女への投影がもたらす創造性

奈良美智、ヤン・シュヴァンクマイエルらにおける少女の機能

性交不可能な対象としての少女イメージがもたらす単為生殖（パルテノジュネーズ：ドゥルーズ）に基づく創造性

・「戦闘美少女」はオタク的欲望の最大の結節点であると同時に、創作活動においては多産性をもたらす。

・その機能において明らかにされるのが、オタク論を可能にする超越論的視座、すなわち精神分析の視座にほかならない。

# 竹熊健太郎 Kentaro, TAKEKUMA（編集家）

## オタク第一世代の自己分析
## ～あくまで個人的立場から～

1960年生まれ。編集家。神奈川県立座間高校在学中にミニコミ誌「摩天楼」創刊。高校卒業後、桑沢デザイン研究所に通うが一年で中退し、自販機ポルノ誌の編集者に。以後編集・ライター・マンガ原作等に従事する。著書に『サルでも描けるまんが教室』（相原コージと共著／小学館）、『私とハルマゲドン』（ちくま文庫）。編著に『庵野秀明パラノ・エヴァンゲリオン』『箆棒な人々』（共に太田出版）等。現在、スピリッツ増刊ＩＫＫＩ（小学館）に『追跡者～幻の漫画家・韮沢早を追え！』を連載中。

### ■ 70年代～80年代　「オタク」はなぜ成立したのか？ 第一世代からの証言

中森明夫、浅羽道明、宮台真司ら（彼らは皆オタク第一世代に属する）の論説にもあるように、いわゆる「オタク」と後に名付けられることになる層は、70年代後半に急激に増加した。これはなぜか？

→戦後の高度経済成長の成功による中流家庭の増加（オタクは中流以上の経済的基盤なくしては成立しえない）。

→敗戦後、津波のように押し寄せた西欧のサブ・カルチャーと、それの日本的な咀嚼過程が70年代まで続く。

→同時に、70年代初頭の学生運動の挫折と、オイルショックによる経済停滞により、「大きな物語」が喪失。

→政治的・思想的な「大きな物語」の代替物としてのサブカルチャー。「親に対する反抗の形」としての「児童文化」。70年代中盤に登場するコミケットや、その数年後に成立した「ロリコン」同人誌も、初期のそれはカウンター・カルチャーの文脈で捕らえなければ理解できない。意図的に「大人にならない」ことで「大人社会」を批判する構図。

→いわゆる「新人類（サブカル）」と「オタク」は70年代においては同じものであったが、77年のアニメブームを境にしだいに分派していく。これは学生運動の分派過程と似ている。

→マンガやアニメは、「大きな物語」の代替物としてのそれであったから、第一世代オタクには当初から自己韜晦の傾向が強かった。ここから「悪趣味文化」「パロディ文化」が発展していく。

→しかしアニメブーム以降、アニメやマンガに「素直に」熱狂する人々も増えていく。数としてはこちらが多い。それ以前からそうしたサブカルチャーを「反抗のかたち」として捉えていた人々は少数派となり、「密教化」していく。

→80年代中盤～90年代は、一部の「密教徒」が「顕教徒」を操作しつつ、総体としてのオタク文化を隆盛に導く過程である。その典型的な動きがGAINAXである。

### ■ 90年代～90年代中盤　オタク文化の爛熟

●90年初頭にかけて隆盛を極めるオタク文化。しかし反面それらは「密教」「顕教」も含めて消費の一形態に過ぎず、消費されるべき資源（この場合は作品や作者のモチベーション）はどんどん枯渇していった。

→マンガにおいては「少年ジャンプ」のトーナメント連載方式にみられるように、ここでも「物語」が喪失していく（動物化？）。ここにおいて、手塚治虫以降追求されてきた「物語を表現する媒体としてのマンガ」は決定的な変質を迫られ、行き詰まり感を強めることになる。89年に「サルまん」を描くにあたって、私にはそうした意識がはっきりあった。

### ■ 95年　オタク的「大きな物語」の終焉

●95年に発生した「地下鉄サリン事件」、そして「新世紀エヴァンゲリオン」は、オタク第一世代がそれでも抱いていた「オタク版大きな物語」の終焉であると言える。

→地下鉄サリンはともかく、「エヴァンゲリオン」は「物語」の喪失した時代でいかに「創作」を行うかを身をもって示した壮大な実験であり、同時に消費のニヒリズム（密教）に埋没するオタク達への（作者の自己批判を含めた）異議申し立てだった。

→ゆえに、「人類オタク化計画（?）」を夢想していた一部の第一世代があの作品に生理的拒否反応を示したのは当然である。

→「エヴァンゲリオン」は恐ろしく多面的な作品なのでさまざまな解釈が可能だが、以上の文脈から解釈するなら、作者が「自分の足下を見ろ」と観客に突きつけた作品であるということができる。それはもちろん作者・庵野秀明にも突きつけられた課題である。

### ■ 95年以降～　「動物化」した時代の中で「物語」を紡ぐことは可能か？

すでに万人がコミットしうる「大きな物語」が壊滅したことはほぼ明らかである。このような時代にあって、私たちはどのような態度で生きればよいのか？

→ひとつの方向としては「動物化」を徹底させること。げんに多くの人がそのような傾向にあるが、しかしこれは危険な要素も内包している。

→なぜなら、生理的快感をともなう「偽りの大きな物語」がもし与えられたとき、そうした人々がその「物語」に抗しうるかは疑問だからである。

→また既成の作品を動物的に消費しようにも、作品資源はすでに枯渇しつつある。

→そして作品の作り手の側は、「大きな物語」消失後にどのようにして創作のモチベーションを維持すればよいのか。

→この時代にあっての創作のモチベーションは、必然的に個人の内的な問題にならざるをえない。

→ここでセクシャリティという古くて新しいテーマが浮上する。「エヴァ」以降の庵野秀明の軌跡（「ラブ＆ポップ」「式日」）は、こうした文脈で見るなら私的には理解できる。

# 永山 薫 Kaoru, NAGAYAMA（漫画評論家）

## セクシュアリティの変容

1954年、大阪生まれ。近畿大学卒業後、松岡正剛が主宰する工作舎遊塾に入るために上京。半年後、遊塾を離れ、会社を辞め、「月刊・宝島」「Billy」などで硬軟ごちゃまぜのライター生活に入る。現在は評論家、作家、編集者、漫画原作者。永山薫名義では主に漫画評論家、書評家、インタビュア、エロ漫画エヴァンジェリストとして活動中。長年にわたり年間千冊以上の新刊エロ漫画単行本のチェックを続け、漫画表現におけるセクシュアリティについて考察している。本名の福本義裕名義では長編サイバーパンク小説「アミューズメントボーイズ」（大陸書房）、長編評論「殺人者の科学」（作品社）などの著書がある。他にも様々なペンネームを駆使して暗躍中。ホームページ「永山薫の週刊少年バビロン」http://picnic.to/~babylon/

### 1）前提の確認

#### ■ 創作物の読まれ方

視点は一つではないということ（スイッチングと同時多発と重層的な欲望）。

意図的な誤読、変容、解体、再構築。

サンプリングする欲望。

一つの極点としての「萌え」。

#### ■ 双方向的な創作物

作家個人が発表を前提とせずに創作した作品を除き、同人誌作品を含め創作物はすべて商品としての側面を持つ。

商品である以上、市場のニーズとは無関係でいられない。

市場情報は主に編集者を介して作家へフィードバックされる。

市場情報をベースに売れ筋を模倣するキャラメル商法。

理想形は市場分析により需要を先取り、あるいは需要を創出すること。

市場分析に拘泥して失敗した例もある。

### 2）歴史の流れ

#### ■ エロティックな漫画の歴史

（校正なしの覚え書きですので、固有名詞、版元表記、創刊年などに錯誤があるかもしれません。ご寛恕下さい）

**戦後**

カストリ雑誌の時代。

赤本。

手塚治虫デビュー（「マアチャンの日記」46）。

「少年」（46）

「漫画少年」（47）

**50年代**

風俗雑誌。貸本漫画。漫画と実話とヌードグラビアの「土曜漫画」「週刊漫画Time」。

大人漫画誌の登場（「漫画タイム」白羊社・55）。

劇画の登場（「影」56）。

リアリズムとしての裸（白土三平「忍者武芸帳・影丸伝」59）。

「週刊少年マガジン」「週刊少年サンデー」創刊（59）

**60年代**

「漫画天国」（60）

「ガロ」（青林堂・62）

「平凡パンチ」（64）

「COM」（66）

青年劇画の登場と台頭（「コミックマガジン」66、「漫画アクション」双葉社・67、「ヤングコミック」少年画報社・67、「漫画ゴラク」67、「ビッグコミック」小学館・68、「プレイコミック」秋田書店・68）

「土曜漫画」などの漫画誌へのシフト。実話、小説の代替物としてのピンク漫画。笠間しろう、椋陽児、歌川大雅。

永井豪「ハレンチ学園」（68）

**70年代**

風俗雑誌

「COM」「ガロ」の影響力。

榊まさると石井隆の衝撃。

「エロトピア」（ワニマガジン社・73）と「ヤングコミック」を中心とするエロも含む青年劇画誌。三流劇画ブームの始まり。

少女漫画24年組の台頭。萩尾望都「トーマの心臓」（74）、竹宮恵子「風と樹の詩」（76）、後の「JUNE」（サン出版・78年）につながって行く。やおいの源流の一つであると同時に、男性向け漫画・劇画へも影響を与える。

第1回コミケット（75）

三流劇画論争。高取英、小谷哲、亀和田武による三大誌「エロジェニカ」（海潮社・75）、「大快楽」（檸檬社・75）、「劇画アリス」（アリス出版）。性的題材の多様化（近親相姦、同性愛、サドマゾヒズム）。エロさえあればなんでもありという伝統。自販機雑誌ブーム。ほぼ並行してアニメ＆SFファンダムによるロリコンブーム。

**80年代：ロリコン革命**

風俗雑誌

「レモンピープル」82年2月号創刊。

メカと美少女（Hコミックシーンの戦闘美少女。後にロリコンアニメの傑作「ポップチェイサー」（85）さらには劇場作品「プロジェクトA子」（86）へとつながって行く。

劇画誌の退潮。絶滅したわけではなく高年齢化と相対的な減少。

ニューウェーブコミックとの融合（大塚英志の「漫画ブリッコ」白夜書房・82。中森明夫の「おたくの研究」83/6～。藤原カムイ、岡崎京子、桜沢エリカ、あぽ（かがみあきら）、竹熊健太郎。86年に「漫画ホットミルク」へ）。非エロの「プチ・アップルパイ」（82）。

エロ漫画の単行本が売れる時代。劇画は単行本が売れない。読者のコレクター、マニア化（オタク的行動）。単行本で雑誌の売り上げをカバーできるため、雑誌の戦略が変わって行く。

**80年代中期：森山塔（山本直樹）の衝撃**

森山塔「よい子の性教育」（松文館・85）「とらわれペンギン」（辰巳出版・86）。シニカルなニヒリズム。

「ペンギンクラブ」（辰巳出版・86）「ロリポップ」（笠倉出版社・86）「ロリタッチ」（86）

ロリコン漫画のマイナー化←→巨乳童顔化（ラブコメの文法）。そもそもロリコンである必然はなかったため。グラフ誌を含むロリコンブームには「裸を見たい」というサイレントマジョリティに支えられていた。わたなべわたる「ドッキン美奈子先生！」（白夜書房・87）。

**80年代後半：第一機黄金時代**

フタナリ＆シーメールの小ブーム→鬼畜、身体改造系へも展開。北御牧慶、魔北葵、

ファンダムでショタが登場。

戸山優編集「ビザールコレクション」（白夜書房・89）。伝説的なアンソロジー。しのざき嶺の少年愛もの、北御牧慶のシーメールもの、別役礁の身体改造物。

「COMICアットーテキ」（一水社・88）、「ドルフィン」（司書房・89）

宮崎勤事件（88～89）

**90年代初頭：冬の時代**

有害コミック大弾圧（進化の停滞）

自主規制と成年コミックマーク。

**90年代中期**

ショタ小ブーム（この前後から女性漫画家の台頭）。

第一回ショタケット（95）

「アンダーカバーボーイズ」（茜新社・95）

ロリコン・ブームの再現という側面も見逃せない。ショタ本ならばマークなしでという判断。やおい・ボーイズ系との相互乗り入れ。

可愛い男の子の時代。

**90年代後半**

ショタの浸透と拡散。男×男の必然性が薄かったこと。可愛い男の子が出てくればいい。やおい、JUNE、ボーイズラブ系の男×男の関係性萌えとは違っていた。

ネオ劇画（アニメ絵エロを経由し、過激な表現を志向した結果、劇画的な絵を獲得。劇画とネオ劇画の関係は鮫とイルカのようなもの。フォルムは似ているが別の種に属している）と萌え系ラブコメ（旧来のラブコメ以上に内省的な部分も目立つ）へと二極化。

70年代エロ劇画の再評価運動。

### 3）読み取られるもの

### ■ エロ漫画を欲望の鏡とするセクシュアリティの変貌

● マチズモからの解放と逃走

性的行為、趣味嗜好、表現の多様化。

強い男幻想が崩れて行く。

強くなくていい、弱くていい、受動的であっていい、キミはそのままで、ここにいていい。シンジ君的なボクたちの全肯定。

女性蔑視、女性嫌悪、女性忌避、ゲイフォビア、ホモソシアルはそのまま残っている。ショタ原理主義＝幼年の王国への引きこもり。

● 気持ちいい身体に仮託される欲望

性的対象としての身体から、自己投影の器としての身体へ。

受動態志向の欲望としての女性化願望は常に存在する。

気持ちいい「ボクの身体」としての巨乳、フタナリ、シーメール、ショタ、ロリという見方が成り立つこと。「かわいいボク」さえいればいいというオートエロティック。他人どころか自分の分身さえ必要としない。あるいは自分の分身は誰でもいい。可愛い男の子が登場するからといって読者がホモセクシュアル的ないしはペドファイル的な欲望を刺激されているとは限らない。ロリあるいはショタの場合はインファンテリズムも含まれている。

**【参考資料】**

「別冊新評・三流劇画の世界」（新評社・79）他

# 伊藤 剛 Go, ITO（漫画評論家）

## Pity, Sympathy, and People discussing Me

1967年名古屋市生まれ。漫画評論家、鉱物愛好家。名古屋大学理学部地球科学科卒。データ通信会社で勤務。浦沢直樹氏のアシスタント、まんが家などを経て現在にいたる。現在『ビジュアルコミックアンソロジーCOCO』（エンターブレイン）に編集者として参加。『コミック・ファン』（雑草社）などに執筆。編著書に「東海鉱物採集ガイドブック』（七賢出版）、寄稿書に「萬有ビンボー漫画大全』（祥伝社）、『アストロ球団メモリアル』（太田出版）など。

### 1）前提となる問題の整理

・東－斎藤の論点の齟齬

　表現の問題と主体の問題

・「萌え」概念の整理

・「萌え」を媒介する表現／対象　による区分

　図像萌え／位相萌え

　断片化された「人格のようなもの」に対する所有欲

　＊以下、ほぼ図像で描かれたキャラクターについて論を進める

・セクシャリティ／フェティッシュ／萌え／感情／感情移入　の弁別の要

・キャラクターは本質的に性差は描き得ない

・「萌え（図像）要素」は、任意のフェティッシュ／セクシャリティと結びつきうる

　例）デブ専ゲイ萌えキャラ

### 2）90年代前半・エヴァンゲリオン前夜の気分

・「マンガがつまらなくなった」という言説 ― 90年代前半以降、反復して語られた気分

・「物語の喪失」という紋切型と、マンガの「読み」の多様化

・キャラクターに寄り添う、時間を共有するという「読み」の前景化

・「キャラに萌えるのはダメな奴」

　その表現が問題である筈なのに、それを受容し消費する者の人格の問題であるとされるという短絡

・いわゆるパロディ同人誌に対する、感情的な拒否反応 ― 何にいらだつのか ―

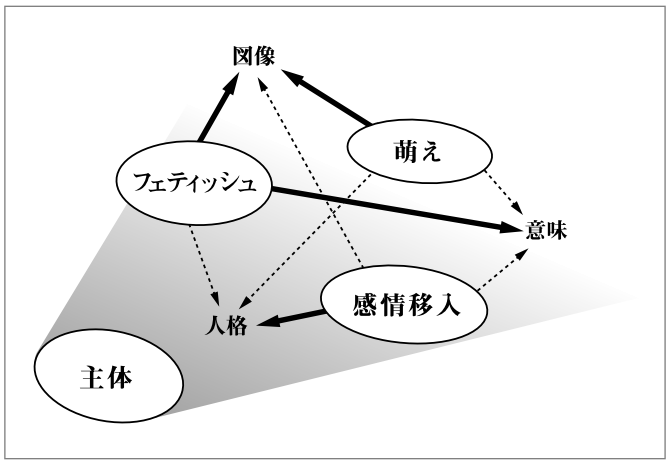



**fig.1　フェティッシュ／萌え／感情移入**

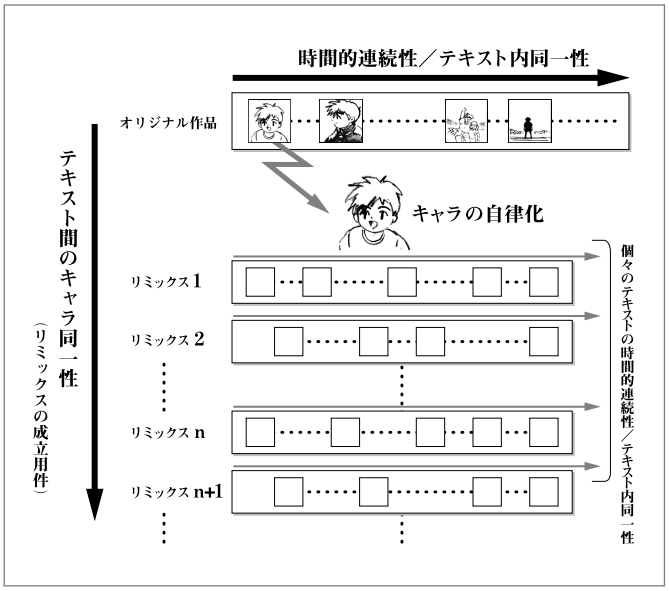



**fig.2　テキスト内／テキスト間キャラ同一性**

### 3）テキストとキャラクターの関係

・80年代以降のリミックスを成立させるもの

・テキスト内のキャラ同一性と、テキスト間のキャラ同一性

　→ fig.2

・テキスト内において、キャラの存在と時間的連続性は不可分

・時間的連続性というコンテクストの共有と、キャラの自律化

### 4）『新世紀エヴァンゲリオン』が提示したもの

・人々の感情移入と萌え ― ロックファンが大泣きする「エヴァ」

・オタクの問題をどうみるか

　エヴァをオタクの閉鎖性の内破とみただけでは不十分

　社会的な自己イメージの先取りと、感情表現の抑圧こそが真の問題

・碇シンジという「かわいそうなぼく」

　無垢なるもの ― よい子、弱い子、純粋な子 ― 「赤い鳥」児童文学運動（1920年代）との連続

### 5） 戦闘美少女 vs ピティ萌え

・「キュート、プリティ、ピティ」

　アメリカ人青年の萌えキャラ区別

・ピティ萌え～マルチ、ホシノルリ、綾波レイ～

　「優しく抱きしめてあげたくなる」

　"abused, neglected, and suffering in her childhood"

・けなげ、はかなげ、いたいけ

・「萌え（図像）要素」は、任意の感情移入要素と結びつきうるのか？

・無垢なるものふたたび

　ギャルゲー『Air』

　マンガ『愛人【AI-REN】』

　キャラ「偽春菜」同人誌群

　近年のギャルゲーにおける「泣き」の前景化と、「無垢」の前景化

・これらの魅力の因は、本当にトラウマなのか？

・「逆恨み」と、事後的な説明として動員される「トラウマ幻想」

### 6) 「動物化」をいう困難

・動物化への抵抗

　萌えに固有の問題 → 恥という感情

　後から動員される「倫理」と、想像上の他者の視線に対する怯え

・「萌えフォビア」に由来するシニシズム→オタク第一世代のオタク密教の起源

・なにが連続し、なにが切断されているのか

### 7）でも、生きていたい

・大きな物語の喪失

　社会的認証の喪失、希薄化 → コムニタス状況

・大人になる＝自分になる　という時代の困難

　「子ども」の消滅？　新たな子ども観の必要

・内なる欲望というストレスにどう耐えるか

### 【参考資料】

・『愛人【AI-REN】』1巻～3巻，田中ユタカ，白泉社（とくに第2巻あとがき）

・『「ごんぎつね」をめぐる謎 子ども・文学・教科書』，府川源一郎，教育出版，2000

・『子ども観の近代 『赤い鳥』と「童心」の理想』，河原和枝　中公新書，1998

# 小谷真理 Mari, KOTANI （SF&ファンタジー評論家）

## おたクィーンは、おたクィアの夢を見たワ。

1958年富山県生まれ。北里大学薬学部薬学科卒。SF&ファンタジーの分野で、フェミニズム批評を応用した評論活動を展開している。主な著作として『女性状無意識』(勁草書房)、『聖母エヴァンゲリオン』(マガジンハウス)、『ファンタジーの冒険』(ちくま新書)、『おこげノススメ』(青土社)、編訳書としてジョアナ・ラス『テクスチュアル・ハラスメント』(インスクリプト)、共訳書としてハラウェイ他『サイボーグ・フェミニズム』(増補版)、マーリーン・S・バー『男たちの知らない女』(勁草書房)などがある。日本SF作家クラブ、及び日本ペンクラブ所属。

### 1. 網状言論への素朴な感想

・「おたくのジェンダーってなんですか?」

・論者は、おたくのジェンダーをどう見たか。

(おたくジェンダー論への視点)。

### 2.『戦闘美少女の精神分析』への註釈

・戦闘美少女と超少女の比較検討について。

・超少女：宮迫千鶴『超少女へ…』（北宋社，1984年）。

・例：『少女革命ウテナ』の場合。

### 3. 90年代やおい論総括

・やおいパネルディスカッションの流れ。

(日本SF大会において1991年から2001年まで)

・歴史的文脈：ポストモダンとやおい。

・構造的文脈：フェミニストとヤオイスト。

・ショタが提起する問題点。

トークライブ
［網状言論F］～ポスト・エヴァンゲリオンの時代～
プレゼンテーション予稿集　Version 1.0

2001年9月16日 印刷
2001年9月16日 発行

執筆　東 浩紀・伊藤 剛・小谷真理・斎藤 環・竹熊健太郎・永山 薫

編集　TINAMIX編集部
アートディレクション 半田将規　　レイアウト 篠田匡史

発行　株式会社多聞
〒171-0033 東京都豊島区高田1-36-27
TEL. 03-5956-8123　FAX. 03-5956-8422
E-MAIL. moujou@tinami.com